学際研究の方法論

On Methodology of Interdisciplinary Approach

辻　村　　明*
Akira TSUJIMURA

本誌（IATSS review）Vol.1, No.1 に掲載された江守論文は，学際研究を進めるにあたって，思考順序として，Why→What→Howという図式を提出のうえ，Why（問題意識）を特に強調し、How（方法論）を軽視した。これに対して本稿は、社会科学の領域においては、依然として、Howの議論が先行しなければならない事情を、2つのケースをとって説明している。第1のケースは、現代社会を分析しようとする場合で、そこではマルクス主義的な階級社会論をとるか、非マルクス主義的な大衆社会論をとるかの選択が必要になってくる。第2のケースは、国民性をとらえようとする場合で、この場合にも3つの立場の違いがあり、その間での選択が必要であることを説明している。

In the first issue of the 'IATSS review', Professor Emori, in seeking to promote the advance of interdisciplinary research, proposed a schema of "why →what→and how" as a process of thinking about traffic problems in which I believe the "why" or problem consciousness was especially emphasized, while the problem of the "how" or methodology was played down. By contrast, I would like to explain in this article by reference to two cases why in the domain of the social sciences the argument on the problem of "how" must be given priority.

The first case focuses on the necessary choice between the Marxist class society thesis or the non-Marxist mass society perspective in attempting to analyze contemporary society. The second case offers an explanation of the necessary selection among three different viewpoints in dealing with the national character of a definite country.

1．まえがき

本誌Vol.1, No.1で，江守一郎氏が「交通安全対策の学際性」という論文を書かれた。その主張の中心点は、研究を進めていく場合の思考の順序として、Why→What→Howという図式を提出され、Whyという問題意識の重視が学際研究をみのり多いものとするのに対し、Howという方法論を重視するものは、多学的（multi-disciplinary）な研究にとどまり、真の学際的（inter-disciplinary）な研究にはなりえない、という主張であった。私はこれを拝見して、これは非常に自然科学的な発想のように思った。自然科学の分野では、多分この考え方が妥当するのだろうが、私がやってきた社会科学の分野では、必ずしもこの図式が妥当するようには思われない。そんなわけで、江守論文に対する批判というのではなく、社会科学の分野における考え方や、問題点を紹介してみるのも、自然科学と社会科学との境界を越えての学際研究を行なおうとしているわれわれ研究グループ**にとって、多少の参考になるのではないかと思うのである。

結論が先になってしまうが、社会科学の分野では、やはり最初にHowの方法論を検討することが依然として必要になっているので、そのことを2つのケースで説明してみたい。

2．マルクス主義か非マルクス主義か

政治学、経済学、社会学といった社会科学の分野では、依然としてマルクス主義の影響が強く、マルクス主義学者の一団が、学界であなどり難い大きな勢力をもっている。それに対して、もちろんマルクス主義の立場に立たない政治学、経済学、社会学もあるわけで、普通それは近代政治学、近代経済学、近代社会学などと称せられ、やはり大きな勢力として、学界を2分している状況である。自然科学においては、実験や実証がしやすく、イデオロギーの入り込む余地はほとんどないのだろうと思われる。イデオロギーの次元で、ああでもない、こうでもない

* 東京大学教授（社会心理学）

** 国際交通安全学会の研究調査部会におけるプロジェクトチームをさす。50年度前期には，「特定交差点の研究」と「暴走族とその対応策の研究」の2テーマについて，各2チームが研究調査活動を行なった。（編集部註）

と果てしない議論をくりかえしている間に、さっさと実験をしてしまえば、事実が先に明確になってしまうのだから、社会科学の領域とは大変に違う。もちろんソ連におけるスターリン時代のように、ルイセンコ学説が教条になって、イデオロギーが生物学を支配するようなこともあったが、これはむしろ例外というべきものであろう。

ところが社会科学においては、社会科学もひとつの科学として、社会の運動法則を明らかにしようとするのであるが、マルクス主義の立場に立つか否かで、社会の運動法則が違ってきてしまうのである。そしてどちらが正しいかは、マクロな現象であるだけに実験することはできず、結局は決め手がないというのが実情である。マルクス主義の立場に立てば、生産手段の所有関係から階級が生まれ、階級相互の対立から階級闘争が発展し、それが歴史の流れや社会の変動を形づくっていくとされる。だからマルクス主義においては、社会の本質は階級対立であり、マルクス主義は社会に関する闘争理論ないし葛藤理論（conflict theory）の典型的な例とされる。

それに対して、社会の本質を均衡や調和にあるとみるのが、均衡理論（equilibrium theory）であり、均衡理論においては、一時的に階級対立や集団間の葛藤があっても、それはむしろ例外的な現象であって、やがてはもとの調和した均衡状態に復すると考える。ちょうど人間の肉体において、一時的に怪我や障害が起こっても、やがては治癒して、もとの正常な健康状態に戻るのと同じである。どんな社会にも、葛藤状態もあれば均衡状態もある。ただ、そのどちらを社会の本質的な性格とみるかによって、その後の研究方法や見方がすっかり変わってきてしまうのである。葛藤と均衡の、どちらが社会のより本質的なものであるかは計量できないし、実験もできない。そこにイデオロギーが入り込む余地がでてくるのである。そこでまず最初に、マルクス主義の立場でいくか、別の立場でいくか、つまりは社会に対してどのような立場から接近していくのかを議論しなければ、研究が少しも進まないのである。その意味でHowが最初にこざるをえないということがある。

しかし、自然科学の研究者からみれば、最初にマルクス主義か否かを議論することなど、およそナンセンスにみえるであろう。また、この学会のメンバーのなかには、おそらくマルクス主義者はいないであろうから、少なくともこの学会での学際研究には、マルクス主義か否かを最初に議論する必要はないであろう。ということになれば、江守説のように、やはりWhy→What→Howの図式が妥当し、方法論のHowは最後でよいということになるだろうか。やはりそうではない。マルクス主義か否かのイデオロギー的議論を抜きにしても、なおかつHowを先に検討しておかなければならない領域がある。つぎにそれを国民性の研究について、説明してみたい。

3．国民性の研究

この学会のシンポジウム部会では、ひき続き「日本人と交通」がテーマにとりあげられている*し、多くの会員が日本人と外国人との比較に関心をもっていることからしても、国民性の研究はこの学会にとって、比較的身近かなテーマであり、いつかは本格的な研究にとり組まなければならないであろう。そのような関係からも、国民性をとらえるにはどうしたらよいか、といった方法論の検討がまず必要になってくる。ところで、これまでのところ、文化人類学や社会学において行なわれてきた国民性の研究には、ほぼ3つのアプローチのしかたがあるように思われる。以下、それぞれについて、簡単に紹介してみよう。

（a）育児法と成人パーソナリティとの関連

初期の文化人類学の研究では、国民性、つまり特定社会の成人にみられるパーソナリティの特性は、その社会における幼児の育児法に大きく関連すると考えられた。たとえばGorerという文化人類学者は、日本人、ロシア人、アメリカ人についての国民性の研究を行なったが、すべて幼児期の育児法の特徴から、その社会の成人のパーソナリティ特性を説明しようとした。たとえば、日本人についていえば、幼児は泣きさえすれば、いつでも授乳されるので、日本の幼児は非常にover-fedな傾向をもっているという。この幼児体験が基礎になって、成人してからも、日本人は食事を軽視する傾向があるという。なるほど、「武士は喰わねど高揚子」といわれ、日本人は食欲の充足と他の欲望の充足とが競合した場合、食欲の充足のほうを後まわしにする傾向はあるであろう。また著者のいうように、日本には一流の中国料理店がたくさんありながら、日本の家庭料理に、中国料理はほとんど入っていない、ということもいえよう。食事を重視する国民であるならば、家庭料理にこそ外国料理の美点を採用するはずだというのである。

＊本年4月および9月に、同テーマによるシンポジムが開催された。IATSS review Vol.1, No.1, p.p.57～62, Vol.1, No.2, p.p.123～132参照。（編集部註）

また日本では、布のおしめを使うので、汚したあとは洗ってまた使う。(最近は、だいぶ変わってきたが) そのため然るべきサインを送って、汚さずにすめば、非常にほめられる。汚せば叱られる。そんなことの集積の結果、日本人は「然るべきときに然るべきことを行なう」というオポチュニズムが発達するという。オポチュニズムはそのときそのときの状況に順応していく態度で、相対主義であり、そこでは絶対的な善悪の価値意識は形成されにくいとされる。

また、ロシア人においては、生後9ヵ月の間は、swaddlingというグルグル巻きの衣類を着せられるが、これがロシア人の性格特性に大きく響いているという。このswaddlingというのは、防寒と危険防止のために、手足がバタつかないように、手足の上から布でグルグル巻きにするもので、赤ん坊を運ぶときは、ちょうど荷物をひっかついでいくような調子で運んでいく。幼児は本来、手足をバタつかせて、外界を探求していくものであり、そのような経験が健全な成長にとって望ましいのであるが、ロシアの赤ん坊はそれが抑えられてしまう。そのために、ロシア人では目が特にものをいうといわれる。「黒い瞳」というのはロシア民謡の代表作である。またグルグル巻きは、1日のうちでも入浴のときには解かれるわけで、グルグル巻きの苦しい時期と、それから解放された楽しい時期とが交互にくり返されていく。

これがロシア人の2重人格を形づくるのに影響しており、感情の揺れが大きいことの原因だともいわれる。徹底的な忍従と徹底的な解放との交互の反復である。その他、自分が苦しい忍従に耐えることに慣らされているので、他人や敵に肉体的な苦痛を与えることに平気になり、ロシア人は残酷だといわれる理由にもなっていく。その反面、ロシア人は底抜けのお人好しといわれる面もあり、それはグルグル巻きから解放されたときの底抜けの喜びが、その根底になっているというのである。ロシア人のこのような2重人格的な性格をあらわすエピソードが、ゴーラーの書物のなかで数多く紹介されているが、ここでは国民性を論ずるのが目的ではないから、これ以上は省略しよう。

いずれにせよ、この育児法と国民性とを関係づける研究方法は、育児法というインプットがあって、国民性というアウトプットが考えられているのであるが、肝心の中間のプロセスが実証的につかまえられないので、多くは牽強付会、時にはこじつけといわれかねないような説明も多い。もちろん「三つ児の魂百まで」という格言もあるように、幼児体験は成人になってからのパーソナリティの特性に何らかの形で影響を与えていると思われるが、肝心の実証ができないところに、このアプローチの難点がある。

(b) 世論調査による統計的アプローチ

(a)のような、牽強付会な解釈が入り込むような余地なくす方法として、客観的な数字を基礎とする統計的な方法がある。世論調査のテクニックを使い、最頻値をもって、特定国の国民性を規定していくのである。日本人の国民性についてのこのような研究の代表は、文部省統計数理研究所が昭和28年以降、5年ごとに調査をくり返している『日本人の国民性』(至誠堂)の研究である。一例をあげれば、人情課長という質問項目がある。

"つぎのような2人の課長がいるとして、もし使われるとしたら、どちらの課長に使われるほうがよいと思いますか。

(イ)規則をまげてまで無理な仕事をさせることはありませんが、仕事以外のことでは人のめんどうをみません。

(ロ)ときには規則をまげて無理な仕事をさせることもありますが、仕事以外のことでも人のめんどうをみます。"

5年ごとの各時期をとっても、ほとんど80%が「人情課長」つまり(ロ)を選んでおり、驚くほど一定しているのである。ということは、「人情課長」を好む性格は日本人の特性だといってもよいわけである。この同じ質問を、ハワイの日系人を対象に調査すべく、質問文の英訳をイギリスの社会学者ドーア氏に相談したところ、いくら英訳しても、内容はイギリス人には理解できないだろうといわれたそうで、こういう問題の所在自体、きわめて日本的なのだろう。ついでにいえば、ハワイの日系人も、かなり「人情課長」を好んでいるが、その比率は、はるかにさがっており(58%)、アメリカ文化による影響が顕著にみられた(林知己夫他『比較日本人論』中公新書)。

そのほか、総理府が昭和47年に世界14ヵ国の青年を対象に行なった「青年の意識調査」(千石保 他著『比較日本人論』小学館)も、この種の研究の代表的なものである。日本の青年が、家庭生活や社会生活について、世界で最も多くの不満をもっていることが明らかにされているなど、貴重なデータがいくつかみられる。ベネディクトの『菊と刀』を批判して、戦後の日本の青年を研究したフランスの社会学者J

・ステッツェルの『菊と刀のない青年』も、世論調査のデータをもとにして、日本人の特性を探っていこうとしたものである。

いずれの研究にも、貴重な注目すべき結果が数多くあらわれているが、なおかつどの研究も、どうも退屈に感じられるのである。世論調査の方法というのは、多少、質問項目に独創性を発揮しうる余地があっても、概していえば、金と時間さえあれば、一定のルールにしたがって、誰でも行なうことができる性質のものであり、研究者の独創性を発揮する余地はあまりない。そんなことのために、知的なおもしろさというものがなく、単純な数字の羅列による無味乾燥さをぬぐうことができないのである。「貴重なデータではあるが、あまりおもしろくない」というのが、世論調査による国民性の統計的分析の特徴である。

（c）鍵概念や文化的パターンをとらえる方法

以上の2つに対して、最後に、研究者のすぐれた洞察力によって、特定の国の国民性の中核に迫るといった研究がいくつかある。日本人の国民性についての研究に限定していえば、ベネディクトの『菊と刀』（社会思想社）、中根千枝『タテ社会の人間関係』（講談社）、土居健郎『甘えの構造』（弘文堂）などがあげられる。もちろん戦前のものとしては、九鬼周造『いきの構造』（岩波書店）、和辻哲郎『風土』（岩波書店）など、すぐれた哲学的な業績があるが、ここでは戦後のものに限定しておきたい。

ベネディクトの業績は、戦争中、相手国を研究しておかなければならないといった政策的な要請から行なわれたものであるが、日本人についての学問的業績として高く評価されるべきものである。そして私が特に敬意を表したいと思うのは、彼女は1度も日本にきたことがないうえに、インターヴューした日系移民はわずかの3人でしかなかったということである。このことは、本書のなかで触れられているわけではなく、私が別のアメリカ人研究者から聞いた話なので、真偽のほどはわからない。しかし、彼女がつぎのように、世論調査的方法をはっきりと批判しているところをみると、さもありなんとうなづけるのである。

「このような研究（慣習についての研究）では、じきに、もうこれ以上いくら多くの報告者を追加しても確実さをふやさないような点に到達する。たとえば、誰が誰に、いつおじきをするか、というようなことは、日本人全体の統計的研究を少しも必要としない。日本人がおじきをする、一般に承認された通例の場合は、ほとんど誰でも報告することができる。そしてそれを他の2，3の報告によって確認すれば、もうその後は、100万人もの日本人から同じ報告を受ける必要はない」

ベネディクトの立場からいけば、日本人の慣習、つまり「文化のパターン」を把握すれば、数量的分析はほとんど不必要になってしまうのである。そして彼女も、従来の文化人類学的研究の伝統を踏まえて、日本人の育児法にも関心を払っているが、一番重点をおいているのは、日本人の生活における「恩」の意味と、その返済の方法や考え方についてである。『菊と刀』の内容を紹介するのは本稿の目的ではないので、ここでは彼女の方法論的特徴だけを確認しておけばよい。文化のパターンの発見にあたっては、研究者のすぐれた洞察力が必要なのであり、凡百の研究者が見落としているところに、すぐれた発見をするのである。（こういうと、私はベネディクト一辺倒にみえるかもしれないが、『菊と刀』にも大きな誤りや欠陥のあることを承認している。しかしそれをここで議論している余裕はない。）

中根千枝氏の『タテ社会の人間関係』も、すぐれた洞察力に基づいた日本人論である。彼女の場合の鍵概念は「場」と「資格」ということで、外国人（インド人なども含めて）は人間関係において「資格」を重視するのに対し、日本人は「場」を重視するという違いがあるという。つまり「資格」とは、その本人の生まれつきにせよ、後天的に獲得された能力にせよ、その本人に属する資質である。それはどの会社に所属するかということとは別で、印刷工なら印刷工という能力のことをいうのであり、外国人はこれを重視する傾向があるのに対し、日本人は自分の所属する組織（これを「場」という）に重点をおいて行動する。相手も、本人の所属する組織の人間として応待する傾向が強い。その結果、日本人においては、「場」を越えて、「資格」によってヨコに連帯するということがきわめて困難であり、所属する組織の「場」のなかに関心が集中される。その結果、「場」のなかのタテの人間関係が重要なものになってくる。これなども日本人の誰もが日ごろ薄うすと感じていたことを、的確に鋭く指摘したものといえよう。

最後にもうひとつ、土居健郎氏の『甘えの構造』もすばらしい日本人論である。土居氏の場合は「ある国の国民性はその国の言語にあらわれる」という

考えから、日本語独特の表現に注目するのである。そのそもそもの原動力になった原体験について、おもしろいエピソードを紹介している。土居氏が最初アメリカに留学したとき（1950年）、指導教授から何かちょっとした親切をされたのだろうだが、そのとき、どういうのか、Thank you という言葉がでずに、I am sorry といってしまったという。そうするとその教授は、けげんそうな顔をして、What are you sorry for? と聞いてきたというのである。日本人の場合、目上の人に礼をいうのに単なる Thank you ではあまりにもぶっきらぼうで、失礼だとの気持ちが働くのである。I am sorry（どうもすみません）という方がぴったりするのである。そしてそもそも「すみません」というのは、ベネディクトの分析にもあるように、親切という恩を受けて、その恩が絶大なので、いくら返済にこれ努めても、「済まない」というところからきた言葉である。もちろんこれは外交辞令であるが、相手から受けた恩を大きく表現するひとつの知恵である。だから贈り物をするとき、「つまらぬ物ですが」とへりくだるのも、同じ心理の表現とみることができよう。

このような問題意識があったため、土居氏においては、日本語独特の表現を追究していくことになったわけである。そしてそこに見いだされたのが、「甘え」という言葉である。語源的には赤ん坊が最初に発声を覚える「ウマ、ウマ」からきているのではないかとみられ、母親に対する依存の感情や態度を表わす言葉とみられる。また、指摘されてみてなるほどと思うのは、日本語には対人関係を表現するのに、「人を甘くみる」とか、「聴衆を呑んでかかる」とか「人をなめるな」といったような、口の感覚や動作に関連した言葉が多く使われている。これはほんの一例であるが、このような日本語独特の表現をたくさん集め、鋭い分析がなされているのである。

ここにあげた3著は、いずれも統計的な数字はいっさい使っておらず、もっぱら洞察力によるおもしろさが躍動している。私も私自身の日本人論を考察していく場合、この第3の方法をとりたいと思っている。

いずれにせよ、以上において、国民性を把握する場合に、少なくとも3つの方法があることを指摘したわけである。この3つの方法のうち、どれが一番妥当であり、どれが最も有効であるかは、大いに議論しなければならないことで、どの方法をとるかを決定しないことには、それ以後の研究は一歩も進まないのである。その意味で、やはり方法論が先にこなければならないのである。江守論文における How（方法論）というのは、すでに研究の結果出てきたある結論を「いかに現実化するか」という応用技術の問題であって、私のいう基本的な立場の選択の問題ではないように思われる。方法論という同じ言葉を使っていても、自然科学と社会科学とでは、違った次元で使われているように思われる。社会科学における方法論というのは、研究のアプローチそのものにかかわる問題である。Why が最初にこなければならないと江守氏が主張されること自体、ひとつの方法論議なのである。問題意識（Why）が大切だと主張されることには全く賛成であるが、How を軽視されていることに疑問を感じないわけにはいかない。

4．学際研究と多学的研究

江守説によると、Why を重視する研究こそ学際研究（inter-disciplinary）になるのに対し、How を重視する研究は多学的研究（multi-disciplinary）におちいるとされるが、私は学際研究になるかどうかは、Why を強調するか How を強調するか、ということとは無関係ではないかと思っている。Why を強調する研究にせよ、How を重視する研究にせよ、専門分野を異にした研究者が共同研究をして、それぞれの専門分野からの寄与が全体の成果のなかに首尾よく統合されていれば、それが学際研究なのである。学際研究というのは、要するに、各専門分野の全体に対する統合の度合によって決まるものだと思うのである。したがって、学際研究がうまく実現するためには、プロジェクト・リーダーの強いリーダーシップが要請され、ともすれば専門分野の特殊研究に分散してしまいやすい個々の研究を、つねに全体の枠組みのなかに位置づけていく方向性を確保していかなければならない。一番望ましいのは、異なった専門分野のことまで本当に理解することができるという能力であるが、それは望むべくして、なかなか実現困難であろう。ということになれば、有能なリーダーシップのもとで、全体の枠組みのなかにおける自己の役割を認識して、全体への統合を図る以外にないであろう。

われわれがこの半年間行なった交差点の研究は、トレーニングが主目的ではあったが、まだ中間段階にあり、これで学際研究のレベルに達したとはいえない。楽しい研究であったことは確かであり、専門の違う研究者から啓発されることも多かったが、ま

だ、異なった専門の研究者が互いにコミュニケーションをかわしたという程度のものであって、このままでは多学的研究といわれてもしかたのない状況ではなかろうか。要は今後の研究によって、それぞれの専門が全体のなかに有機的に統合されていくかどうかにかかっている。